小泉八雲のことども（続き）

根　本　重　熙

教師としてのハーン

明治23年（1890年）9月，松江市殿町8番地にあった島根県尋常中学校（通称，松江中学校）と，隣接の，同尋常師範学校の教壇に立って以来，明治37年（1904年）9月26日に，東京府豊多摩郡大久保村大字西大久保265番地（現，東京都新宿区西大久保2丁目265番地）の自宅で，その多彩な生涯の幕を閉じるまでの14年に亘る在日期間の中で，神戸クロニクル新聞（The Kobe Chronicle）の主筆時代（明治27年10月入社，翌年2月に，眼疾のため退社）を除いて，自余の期間は，教鞭片手に，ひたむきの人生行路を歩み続けたこの人は，明治29年（1896年）10月に在米の若い親友エルウッド・ヘンドリックに通信して言う。

『現在教授陣（東京文科大学の）には，哲学教授・Raphael von Koeber, Heidelberg 大学出身；サンスクリットおよび言語学教授・Carl Adolph Florenz, Reipzig 大学出身；フランス文学教授・Emile Heck, Lyon大学出身；—筆者注：先に名前が出た大谷正信は，Heck 教授は Poitiers 大学の出身者だと記憶していると主張するが。—それから，どこ出かは悪魔が知っている英文学の教師が居る』と。また別の便では『無神論と英文学と自分勝手な色々の怪しからぬ意見とを教えているラフカジオ・ハーンという，恥とか上品とかの念が全くない男，（背教者で不信心家）が居る』と自虐的な消息を伝えたこともある。

エルウッドよ。とハーンは心友に訴えかけている。『外国人の教授連は一人も，帰国した後でも，多くは言わない。その受けた待遇に不平を述べる正しい理由がある者は，誰一人なかったのだ。物事が，西洋で見る通りであるならば，（キリスト教信者にしてその上に紳士たる者を，という要求があるだろうから）私は教えることを許容されないであろう。私は，自分が分っていない題目について講義している。でも，悔恨は無い。私よりも遙かに少ししか知っていない人たちを指導するだけのことは，私は知っているのだ。だから，一二年たったならば，多分は今の地位にもっと適応するだろう』と。卑下しながらもその自信と覚悟のほどを伝えている。

ハーンは在熊時代のある日，松江中学校教頭西田千太郎（英語を担当していた）の質問の手紙に答えて，書き送っている。

『ご質問の下線を施した語は，ユダヤの聖書からとったものです。幾分かは，現代人におけると同じく，古代セミチック人種の心の中では，価値と重量の観念が，密接に結合していて，一切

の物が重量によって売られ，重量によって価値があったのです。重さを測るには，数種の天秤を用いるので，日本と同様，天秤の一端に錘を吊し，他端に売る物品を置くのです。もし，余りに軽ければ，その物品は“目方が不足して”（found wanting）いたのです。だから“軽んずる”to make light of などという英語の文句に，このように測定した重量の観念が残っています。』

『さて，ユダヤ人の神話では，神は，人の有する善（人の道徳的重量則ち価値）を天秤で測ってあまりに軽い場合には，その人を地獄へ送るものとして現わされています。現在では，世論が，天秤を携えた神なのです。例えば，私が著作家ならば，私則ち私の作品は，世論あるいは文学的意見の天秤で測られる。そして，多分目方が不足しているでしょう。聖書には“秤にて測られる”という文句は，たくさんあります。最も有名なのは，ダニエル書のベルシヤザルの物語で用いられ，最初にこれを詩的に使用したのは，ヨブ記（ユダヤ人ではなく，アラビヤ人によって書かれたものと想像されている書物）の中にあります』と自嘲を含めて，行き届いた説明を試みている。

ハーン先生の教育者的重量は如何

ハーンが教師という職業についたのは，既述の通り，松江中学校でのそれが，最初の経験である。しかし彼は，アメリカでの新聞記者時代1878年に，アイテム紙（New Orleans Item）に論説“教育訓練における想像力”The Imagination in Educational Training を書いた人である。人生の初期に体験したローマ旧教教育（英仏両国での）の苦悩の中から脱皮して，彼のいわゆる“自助”を新天地に試すべく，移民列車に揺られて，アメリカに到着後，ただその日々の糧を求めるのに急な生活の中で，彼が，後年大谷に向って言う“自分で自分を教育せざるを得なかった”にも拘わらず，有能な新聞記者として活躍するのに十分な，又は，それ以上の程度にまで彼自身を教育することに成功した過程において，前記の“教育訓練における想像力”は，ハーンにとって，自分自身を被験者にして実験を繰り返して来た有効な指導原理なのである。彼がそれを実地に適用しつつ殆ど独学で到達し得た知的水準の重厚さは後年東京文科大学で彼が展開したユニーク（平易にして興味深い語りかけの方法で，透徹した知的内容を，異文化の学生達に伝達することに見事な成功を収めたという意味で）な講義の中に集約的に実証されている。（講義内容が出版されたので）そこでは，彼は最早，中学，高等学校教師時代とは異なって，片々たる一英語教師の地平線から遙かに高く飛翔を遂げ，我国の最高学府の場で，英文学の解説者，文芸評論家としての超重量ぶりを帝国大学の天秤上に表示するに至った。

卒業生へ向けて一言お礼を。（教師冥利？：ハーンのささやかな喜悦。）

親愛なる学生および友人諸君。

私は1901年の卒業生諸君の立派な写真およびそれぞれの肖像に，小さい索引をつけてくださった思慮深いご親切に対して，心からお礼を申します。そのご親切は，私自身のような近眼の者が本当に有難く思うことです。

以前の学生であり友人でもある人々の，過去11年間（ママ）に集まった写真を眺めることは，私にとって決して飽かない楽しみです。そしてこの楽しみの源にと，諸君が寄付してくださったものは，

甚だ貴重です。時々私は昔教えた誰かの目ざましい報知を読んだり聞いたりします。その人は，人の上に立っ人――立法官，判事，陸海軍の将校――或は成功した著述家，教師，どこか遠い遠い国において日本のための代表者となった人のことを聞きます。そんな時，その人の学生時代の写真を眺めて，その人の青年時代の顔に，その特色の何かの暗示が現われているところを見出そうとすることは，甚だ愉快なことです。

数日或は数週間で，諸君は学生ではなくなります。外部におけると同様内部においても，色々な未知の責任や可能性によって変形します。しかし，成功を得た場合にも，大学時代を忘れたりそれを回想することができなかったりする者はあるでしょうか。私は諸君の勝利を尽く聞くことができるかどうか分りません。私は段々と年をとるからです。しかし，諸君は得意の絶頂の瞬間に，最もはっきりと大学の経験を思い出すでしょう。その時に，諸君は，昔いつも知っていた，妙な英語の教師のことを，深切な微笑と共に，思い出すこともあるでしょう。そしてその際には彼は諸君と共に喜ぶことができなくても，諸君が明治34年（1901年）の卒業生の写真を贈って，彼を甚だ幸福にしたことを喜こんで思い出すことができましょう。

東京帝国大学文学部学生――1901年の卒業生へ。

永久に感謝して，心から諸君の者である小泉八雲。

教師ハーンの追憶

ハーンの教壇生活の振出である山陰の松江中学校時代へと逆戻りすると，例の処女出版“知られぬ日本の面影” Glimpses of Unfamiliar Japan の”英語教師の日記から”の中で彼は述べている。

『私は出雲松江の尋常中学校および師範学校において，１ヶ年間英語教師として奉職する契約をしている。尋常中学校は暗青灰色に塗った，欧風の大きな木造二階の建物である。これには約300名の通学生を収容する設備がある。二方は運河，二方は甚だ静かな街路で境になった大きな方形の地面の一方に建っている。この敷地は古城に甚だ近い。

師範学校は同じ地面の他の一角を占めた更に大きな建物である。同時に，更に立派である。真白に塗られて。それから頂上に小さい円屋根がある。師範学校には僅かに150人程の生徒しかいない。皆寄宿生である。この日（明治23年，９月２日）は私が学校に出た第一日である。（訳者注：当時は学年は９月に始まり７月に終った）西田千太郎氏は私をつれて，これらの学校に案内し，校長および同僚となるべき人々に尽く紹介し，授業時間と教科書の事につき必要な注意を与え，必要な物を，私の机にのせてくれたりした。』　（以下略）

『私は中学校において３時間教えたところである。そして日本の生徒を教えることは，私が想像したよりは面白いことが分ってくる。各クラスは，西田氏が予めよく準備しておいてくれるので，私が全く日本語を解しないことが，教えることに，何等困難を来たさない。その上，生徒は私が話す時には私の言葉を尽くは解し得ないでも，白墨で黒板の上に書くことは何でも分る。』と。

次に生徒の側からの報告を聞こう。

その後（カナダ人エム・アール・タットル：M. R. Tuttleの後）へおいでたのがヘルン先生であった。私どもは，会話・英作文・読方・これだけを教えて頂いた。ところが，われわれ会話なんか純粋の外人からの話はなかなか分りません。これには閉口したものです。向うで話される事はこちらへ分からんし，こちらから言う事も向うへは分からんし……。しかしどうかこうか教えて頂いた。（大村貞蔵談）

先生は教室で絶対に日本語を使われなかった。とにかく英語一点張りで。当時中山先生（注：中山弥一郎。島根県尋常中学校と師範学校の英語教師で生徒監をしていた。後神戸や横浜の商館に勤めた。と）が普通英語の先生でしたが，大抵ヘルン先生の授業の時には傍について居られた。そして色々とお世話くださいました。ハーン先生は説明等に分からないことがあると（生徒に，説明が，筆者注）身振り，手まね，塗板画（ママ）で補われた。その時の先生のご苦心を私たちは想像していました（並川栄四郎談）

西田先生が私たち2年生の教室へ，新任のヘルン先生を案内し出席簿のことなどを説明してから他の教室へ授業に行かれた。9月1日は教科書を買うだけ，授業は2日から。ヘルン先生の授業は読方，書き取りと作文で書き取りは先生が読まれるのを順番に一人づつ黒板に書く，先生が直される。私たちはそれを写す。耳で聴く力の養成によい練習であったと思う。（座談会，“旧師小泉八雲を語る”落合貞三郎談）

『先生は極めて几帳面であった。そして熱心に生徒を指導された。細い線で黒板に絵をきれいに書いて説明されたが，絵もなかなか上手であった。英語を教える場合でも，字句を解剖したり，類語を区別して明確に説明された。凡ての生徒の理解を基礎とする教育法であった。当時の風潮は詰め込み主義とか暗誦主義であった。例えば文章を作るにも軌範的文例によったものでないと，満足な点数を与えられなかったが，先生は，これを喜こばれなかった』とは「出雲における小泉八雲」の著者根岸盤井の評価である。ハーンの教育法についてのこれは誠に明晰で具体的な報告である。ハーンの教師ぶりは，当時の一般的水準を越えて斬新で，種々の独創的試行を内蔵している。今日的評価にも十分に堪え得る先進的教師の面目躍如である。即席イラストで生徒の興味を集中させ説明の補強と理解の深化を狙（わら）う策などは秀抜である。終（つい）の教職者ハーンがその指導原理を縦横に適用しての実践篇は松江の地で滑出誠に好調であるようだ。

優等生の表彰（この試みは東京帝国大学を辞するまで継続したということである）

先生は，英語の優等生には，個人として（筆者注：先生の自腹で）賞品を与えられる慣列で，余もまた“グリーク・ヒーローズ（Greek Heroes）”1冊を頂戴し今も好個の記念品として保存している。先生の教育は誠に親切で，われわれの幼稚な英文を懇切に訂正して，なお，すこぶる詳細な批評を記入されたものだ。（藤崎八三郎「小泉八雲先生の追憶」）

なお大谷正信は4年生の試験に対しマコーレー（Thomas Babington Macaulay）の“Lays of Ancient Rome”とダーウイン（Charles Robert Darwin）の“Carol Reefs”の2冊をもらったということである。

因に，この時代は，文明開化の鹿鳴館時代の名残りが濃厚であり，文部大臣森有礼は，日本語を廃止して，その代りに英語を採用しようなどという戦慄的放言を大真面目でぶち廻ったり，欧米人と雑婚して人種改良を断行すべし（高島嘉右衛門）というような極端な欧米崇拝主義，擬似近代化思想が横行していた時代風景の中で，自ら希望して独山陰の僻地に赴いたハーンの存在は，一際異彩を放って新鮮に見えたことであろう。

前号で登場した，ハーンの伝記を物した田部隆次は，その著書の中で次のように述べている。『珍らしくも今日来た（松江へ）西洋人は日本が好きだ。日本人自身が，つまらないと思っている物までも，あの異人は好むようだという声が，学生からその父兄へ，学校から市中へと伝わって行った。松江の人々は不思議だと思った。感嘆した。さなきだに，欧米人でさえあれば，日本人に尊敬されるという時代に，日本を愛好するが故に，一層強度に，日本人から敬愛されるという好位置に立った。その上に松江人は元来が外国人を歓迎する市民である。やがて全市挙って，ヘルン先生（松江訛りでは“フェロン”先生）を敬愛するに至ったのも不思議ではない』と。

小泉八雲の英訳

都々逸：　月にむら雲花には嵐
　　とかく浮世はままならぬ

Gathering clouds to the moon ; storm and rain to the flowers: Somehow this world of woe never is just as we like.

和歌：　あすありと思う心のあだ桜
　　夜半に嵐の吹かぬものかは

Thinking to-morrow remains, thou heart's frail flower-of-cherry. How knowest whether this night the tempest will not come?

松江中学校生徒との交歓

『私の愛する学生は午後によく私を訪問する。彼等は始めに来訪を知らすために名刺を出す。お上りと言われて，戸口に履物をぬぎ私の小書斎に入り平伏してお辞儀をする。そして私たち一同は床の上に坐る。この床は日本の家では柔かなしとねのようになっている。女中が座ぶとんと菓子と茶をもって来る。（中略）互にあいさつして座ぶとんの上に坐ったのち，暫らくつつましく皆黙っている。それから先づ私から口を切る。学生の中には相当よく英語を話すのがいる。簡単な文句を用いて，熟語などを避けて一言一句徐々に，はっきりと言えば皆によく分る。彼等が知らない言葉を用いねばならぬ時には，英和辞典を参考にする。それには仮名と漢字の両方でその意味がつけてある。

大概私の客は長居をするが，それが退屈だと思ったことは殆んどない。彼等の話と思想は，この上もなく簡単でまた卒直である。彼等は学問をしに来るのではない。学校以外で先生に習いに来ることは不公平だということは知っている。彼等は私に興味があると思うことについて主に話

をする。どうかすると殆んど話をしないことがある。しかし一種の愉快な冥想に耽っているように見える。彼等が来る真の理由は，同情，意気投合の静かな喜びを得んがためである。知力上の同情ではなく，ただ全く好意を表わす同情である。友人と全く気楽にして居られる時の楽しさである。

彼等は私の書物や絵をのぞく，時々私に見せるために書物や絵(よほど面白い変った物)，私には買えないのが甚だ残念なような，祖先伝来の家宝などを持って来る。彼等はまた私の庭園を見ることを好んで私よりも遙かによくその庭にあるものを賞玩する。よく花を持って来てくれる。どんな事があっても，うるさいこと，失礼なこと，物珍らしくせんさく好きであること，おしゃべりであったりすることは決してない。この上もなく礼儀正しいことは，フランス人でも考えられぬ程で，毛髪の色や皮膚の色と同じく，出雲の少年に固有のものと見える。礼儀正しいと同じく又親切である。私を不意に喜ばせようと工夫するのが，私の少年たちの特に喜ぶことの一つである。そこで種々変ったものを私の家に持って来るか，或は持って来てもらうように取計らう』と。（英語教師の日記）

日本の教育について感あり（ハーンの目で）

近代日本の教育制度では凡(すべ)て教育は極めて親切に穏かに施される。教師はただの教師である。英語の意味で言う Master と言う者にはあたらない。生徒に対して，ただ先生即ち兄の関係を有するだけである。教師は生徒に対して，自分の意志を押し通そうとはしない。罵ることは決してしない，批評がましいこともあまりしない。罰することもあまりしない。日本の教師で生徒を打っ者は決してない。そんなことをしたら，その人は直ちに自分の地位を捨てねばならない。教師は決して怒らない。もし怒ったら生徒の面前および同僚の心中で自分の価値を下げることになる。実際日本の学校には罰はない。時々大のいたずら者が，休憩時間に校舎内に留めおかれることはある。しかもこの軽い罰も直接に教師が課するのではない。教師の苦情を聞いて校長が課するのである。こんな場合でもその目的とするところは，娯楽を奪って苦痛を与えるのではなく，一過失を示して一般の戒めとするに過ぎない。そして多数の例によれば，一人の少年が自分の仲間の前で自分の過失を深く自覚せしめられることは，過失を繰り返すことを妨げるだけの力は十分ある。鈍い生徒に余計の課業を強いるような又は四五百行を写させて眼を労させるような残酷な罰は夢にも見られない。また，仮にこんな種類の罰則があったとしても，現在の状態では，もはや生徒自身が許して存在させておかないであろう。日本国中到るところの教育当局者の大抵のやり方は，罰しなければ十分に制しきれない生徒はその学校に置かないのである。しかし放校ということも稀にしかない』と。

そしてハーンは言う「トム・ブラウン」の学校（訳者注：Thomas Hughes：1823-97，の小説 Tom Brown's Schooldays に現わされた Rugby 校の学生生活。そこには闘争，友情，悪戯，勉強もある)は日本に存在しない。それよりも通常の公立学校は，デ・アミチス，Edmondo De Amicis（イタリーの小説家）の「クオレ Cuore」（訳者注：少年小説で，邦訳名は“愛の学校”，“学童日

誌”など）にあんなにも面白く写してある理想的なイタリーの学校に余程似ている」と。

松江中学校においてのハーン先生とその生徒の間の会話をば，例示して見よう。ハーンはそれを真面目に取り上げて「面白くて啓発されるものである」と評価している。一見些細な日常の問題群に対してでも，彼は，異文化の東西両洋民族間に立つ体の，公正にして賢明な仲介者，教師，解説者等々の立場から，それらに対処したようである。「先生，欧米人がその父と妻と一緒に海に落ちたとして，自分だけが泳げる場合は，先づ自分の妻を先に助けようとすると聞いていますが本当でしょうか」「多分そうでしょう」と私が答える。「何故でしょう」「一つの理由は，欧州人は弱い者を第一に，殊に女や子供を助けるのを男子の義務と考えているからです」「欧州人は自分の父母よりも妻の方を余計に愛しますか」「いつも，そうという訳ではないが，しかし先づ大概はそうです」「でも先生，私どもの考えによれば，それは甚だ不道徳です」

「先生，欧州人はどんな風にして赤坊をつれて歩きます」「抱いて歩きます」「ずいぶん疲れるでしょう。そして，赤坊を抱いて，女はどれほど歩けますか」「強い女なら赤坊を抱いて余程歩けます」「しかし，そんな風に赤坊を抱いていると手が使えないでしょう」「よくは使えません」「それでは，そんな風に赤坊をつれ歩くのは悪い方法です」

松江藩の先進性

明治初年に松江藩の強力な文教政策の下，外国人が招聘された。同3年に仏人ワレット並にアレキサンドルが藩校修道館で仏語を，更に前者は砲術，後者は医学を講じた。同校は当時の日本では最も充実したものの一つであったと思われる。儒学所（学問所），軍学所，英学所，国学所，蘭学所（洋学所）など文武百般22の学科を設けた斬新，綜合的な教育，学術機関で西洋人を招聘して教育にあたらせ，若い藩士を英独仏に留学させて西洋近代文明の摂取に努めた。とのことである。（「松江藩の先進性」と筆者が題したこの項と次項，籠手田知事の項は池野氏著からの教示）

大和島根の地，今や欧米崇拝の真最中。日本各地の諸学校は競って外人教師を求めていた。「日本帝国統計年鑑」によれば，明治27年の所謂お雇い外国人は総数85名その中で学術教師は59名である。大学や高等学校には外人教師が居たが中学校で専任者の姿が見られるのは稀であった。僻地島根県がそれを求めていた事は行政の開明ぶりを示しているであろう。外人教師招聘のことは西田教頭の希望によるらしい，おそらく彼が校長齋藤熊太郎にそれを具申し同意を得て籠手田知事に要請したようである。と。同知事は既述の通り山岡鉄舟門下の駿足。剣道の達人で国粋主義的な一面，教育には開明的で明治21年新学期を目処の外人教師招致に奔走一ケ年の後，22年にタットル，23年にハーンの雇入に成功した。同知事自ら文部省に出向，適当な人物の推挙を依頼し東京大学教授チェンバレン推挽のハーンを松江中学校へ招く仮契約書が東京で，知事とハーンの間で取りかわされた。明治23年7月19日である。藩政以来の教育指向型の風土に加えて，開明型の地方長官と進取潑剌の教育担当者群の協力による優良外人教師招致の真摯な熱望と，片や，古き

良き日本を求めて来雲，日本について名著を物すべしと念願する単純にして明快なハーンの目的意識との双方は，ここ松江の山河と住民の触媒的効果を通じて相互誘導的な絶妙の調和の上に，ハーンの教壇（著作を含むが）生活は絶好の条件下に，始動した。その薫陶により，新生国家建設の水先案内者群養成事業を担当すべき逸材を，松江に迎えていた奇蹟的事実を，やがて世間は発見し認識するに至るのである。

関はよい所　　朝日をうけて，　　大山嵐が，　　そよそよと。

Seki is a goodly place, facing the morning sun. There, from the holy mountains, the winds blow softly, softly —— soyo-soyoto.

————民謡「関の五本松」より。　　小泉八雲訳　————　美保関にて。

松江のある婦人は私の前で，小さい時の珍らしい追懐談を語った。「私が余程小さい時分に，大名が，武術を教える西洋人をお雇になりました。私の父と多数の侍がその西洋人を迎えに出ました。それから，たくさんの人々が見物のため往来の両側にならんでいました。以前西洋人は一度も来たことがありませんでしたので。西洋人は船で来ました。当時はこちらには汽船がありませんでした。西洋人は非常に背が高くて長い足で早く歩きました。子供たちはその人を見て泣き出しました。顔が日本人のものと同じでなかったからです。私の弟は大声で泣き出して母の着物に顔を隠しました。母は叱って言いました「この西洋人は殿様に仕えにここへ来た大へんよい人だから，この人を見て泣くのは失礼千万です」しかし弟は矢張り泣きました。私は恐ろしくありませんでした。私が西洋人の顔を見上げていましたら，その人は近づいて来て，にっこりと笑いました。大きなあごひげがありました。大変不思議な恐ろしい顔だとは思いましたが，よい顔だと思いました。それからにっこりして私の手に何か入れました。そして大きな指で私の頭や顔にさわりました。そして何だか分からないことを話して行ってしまいました。その人が行ってから手の中の物を見たら，それは小さい，きれいな眼鏡でした。その下へ蝿を入れると，なかなか大きく見えます。当時私はこの眼鏡は大変不思議なものだと思いました。今でもそれを持っています。この婦人はへやの箪笥から取り出して私の前に小さくきれいな懐中顕微鏡を置いた。この小さい事件の主人公はフランスの将校（訳者注：前出のワレット）であった。封建制度廃止と共にこの人の勤務は当然なくなった。この人の話は今も松江に残っている。（訳者注：松江のある婦人というのは小泉夫人。虫眼鏡はその時与えられたのではなく，夫人の父親即ち出雲の士族でそのフランス人の学生であった人に与えたのを上の様に記したのである）と，ハーンは妻の幼時の記憶を述べた。“欧米人の顔”についてのハーンの言もう一つ。

文明人の恐るべき顔について書いたのは，奇人フーリエではなかったか。誰にしてもこの極東で欧州人の顔を始めて見た時どんな結果があったか，その人に分ったらその人の骨相学的学説が実際の解決を見たらしく思ったであろう。本国で容貌について，“きれいである”，“人好きがする”，“特色がある”，と教えられているものは，シナや日本では，その通りの印象を与えない。西洋の

イロハ文字ほど自分らに親しい顔面表情の種類は，始めての東洋人には分からない。東洋人が始に認めるものは民族の特性であって個性ではない。

凹(くぼ)んだ眼，突き出した額，鷹(たか)のような鼻，大きな顎(あご)の進化論上の意味（侵略的な勢力習慣のしるし）は飼われた動物が始めて，生物を捕食する敵を見て直ちにその性質を悟ると同じ種類の直覚力で穏やかな人種に悟られるのである。欧州人には，滑らかな顔付きの，細っそりした，背の低い日本人は子供のように見える。そして「ボーイ」は横浜の商人の，日本人の従者が，今日も呼ばれる名である。日本人にとっては始めての，赤い毛の，あばれものの，酔いどれの，欧州水夫は，悪魔か，猩々か，海の怪物に見えた。そして，シナ人には，西洋人は今も“洋鬼”と呼ばれている

日本における外国人の大きな身長，大きな力量，烈しい歩きぶり，は彼らの顔から来る変な感じを強くする。子供たちは，彼等が往来を通っているのを見て，恐れて泣き出した。そして，もっと辺鄙(へんぴ)な所では，日本の子供は，欧米人の顔を始めて見て，今日でも泣き勝ちである』と。

上記の説でも明白だが，ハーンは別の立場からも物が見えた。この人の顕著にして巨大な特徴をなしているものは，人種的，宗教的および文化的偏見群の呪縛から自由な別乾坤で，思考，観察，行動し得る広大な精神的余裕の享受者であったことであろう。彼を極上質の国際的？教師たらしめた稀有の特性の一つである。

明治29年（1896年）11月に彼は例のヘンドリックに通信して言う。

（前文略）私は，君が最近の手紙の中に書いている友人のように，あんな面白い友人について君に書き送ることはできない。それは，そんな友人が一人もないという単純な理由で。（開港場の外国人社会のような，あんな蛙池に，同情者を見出すことは私には全く不可能だからね）。哲学受け持のあのロシヤ人教授（筆者注：ケーベル　Raphael　von　Koeber，ロシア系ドイツ人）はHeidelbergの学位を自慢しているが，異端の者は，その魂を救うがために，生きながら焼き殺して然るべきであると自分は信じるだの，全世界がカトリックの支配の下にあるのを見ることを望むだのと私に意中を述べる。（以下省略）と。ハーンは驚いている。

繰り返し述べたような，国をあげての欧米崇拝時代，世界的規模での，白人による帝国主義，植民地獲得競争の時代背景で展望する時，ハーンの超稀少価値性が愈々その鮮明度を増して来る。

もう一人の愛弟子(まなでし)小豆沢八三郎

小豆沢と正信（大谷）は全然別人種かと人が想像する程，この二人は似たところが殆んどない。小豆沢は大きい骨っぽい，一見愚なような男である。顔は奇妙に北アメリカインデャンに似ている。（訳者注：熊本でこの原書の校正を見せられた時，この比べようはひどいと藤崎氏〔小豆沢〕が抗義した時「決して侮辱ではない。インデャンは世界で最も勇敢なる人種であると言ってハーンに慰められた」とは藤崎大佐の談話）家は富んでいない。ただ一つ書物を買うことを除いては金がかかる娯楽をすることは殆んどできない。その書物を買うためにも，彼は金を得るために暇(ひま)な時に働くのである。彼は本当の衣魚(しみ)である。生れつきの詮索家である。古文書の採集家である。

古い写本や絵本が反古同様に売られる寺町やその他の古色蒼然たる古道具屋古本屋を一軒一軒徘徊している。彼は濫読家である。絶えず書物を借りる。そして最も価値があると思うところを写して後少しも毀損しないで返してくる。しかし一番好きなのは，世界各国における哲学および哲学者の歴史である。西洋哲学史要略というようなものは色々読んだ。それから近世哲学に関するもので，日本語に訳してあるものは，スペンサーの原理も加えて皆読んだ。私はリュイス（訳者注：Gerge Henry Lewes（1817-1878）有名な女流小説家（George Eliot）の夫，「列伝体哲学史」「ゲーテ伝」等著作多し。）とジョン・フィスク John Fiske（1842-1901）（アメリカの人，著作多し，進化論を基としたる著述もあり，"The Idea of God" "The Destiny of Man" 等あり）を紹介してやった。英語で哲学を勉強するのは一通りの骨折りでなかったが両方とも十分に分かった。幸にして彼は非常に強健であるから，どんなに勉強しても身体が悪くなる心配はない。神経は針金のように強靱である。しかも彼は全く禁欲家である。客の前に茶と菓子を出すのが日本の習慣であるので，私はいつでもその茶と菓子，殊に菓子は杵築でできる特に上等品で学生が皆好きであるのを，いつも用意している。小豆沢だけはどんな菓子も食べようともしない。そして言う「私は末子です。真に独立の生活をしなければなりません。大いに難儀をしなければならないでしょう。故に今から菓子が好きになると後に困るでしょう」彼は人間学を相当修得している。生れつき注意深い。そして不思議な方法で松江の凡ての人の歴史を知っている。彼は古い破れた錦絵をもって来て校長（訳者注：西田が当時校長心得であった）が14年前公開演説で主張した意見と今日のそれが全然正反対であることを証明した。そのことで校長に聞くと彼は笑って「勿論それは小豆沢です。小豆沢の方が正しいのです。私は当時極めて若かったのです」と。私は小豆沢がいつか若い時があっただろうかと不思議に思う，と。ハーンの愛弟子中彼は最も愛され，松中時代頻繁にハーン宅を訪問歓迎された。ということである。恩師が熊本に転勤すると彼は九州の藤崎家に養子となり一時期は，熊本高校に在籍。ここでもハーンの指導を受けた。と。彼は後に軍人になった。明治30年（1897年）恩師が焼津の魚屋山口乙吉の家の二階を借りて同地に滞在中藤崎士官候補生が同家を訪ねて来たので両人は帰途御殿場で下車，共に富士登山を試みた。明治37年（1904年）9月26日午後，ハーンは日露戦争のため長らく出征中の藤崎宛に書物を送ろうと書斎の書棚を物色した。最後に慰問の手紙を一通書き，元気で夕食をすませ冗談を言ったり大笑していたが，一時間程後セツの所へ「ママさん。先日の病気また参りました」と小さい声で言ったので，そっと寝床に休んでいるように勧めて寝かせたのが最後であったと彼女は涙ぐんだ。と。

機会教育の実践者

前号で大谷正信が英文学科出身者を集めて文学会をつくり，雑誌を発行する企画で，ハーンに顧問になるよう依頼したのに対し長い手紙をもってこの案に反対したことを紹介したが，ハーンは東京大学での講義の際にこの問題を論じた。"文学的団体の功過に就て"と題する。長いものだが採録する。

私は色々の場合に，文学的団体の功能についての意見を陳べることを求められ，またそれに加入を勧められたこともあるから，この問題に関する私の信念を表明する講義をすれば，諸君の参考になるだろうと思っていた。諸君が是非私の意見に賛成せねばならないということは決してない。しかしその説は私自身の経験よりは，もっと優れたもの，真に賢明な人々の経験と教訓に基いているのだから，それについて考えてみる価値があることを，諸君は，きっと見出すだろうと私は考える。

そこで先づ，私は大抵の文学団体の存在に対してひどく反対であるということを，また，かような団体は青年能才の士を大いに毒する場合があると，私は信ずるのだということを述べておく。

ハーバート・スペンサー（Herbert Spencer, 1820-1903）がその「社会学」に特に主張している一つの一般的原理がある。それは経済界，産業界と同様に，文学界にも適用ができる。その原理はこうだ。苟(いやし)くも一個人で，頗るよくできることは，社会がそれを企(くわだ)ててはいけない。尤(もつと)も一個人が行うよりも，社会がそれを行なった方が，仕事を大いに改善し得る場合は格別である。諸君が知っているが如く，社会学者は，私設会社と国家経営の場合においても，私設会社の方がいつも立派な仕事をするということを懇々と指摘して倦(う)まない。無論，競争と関係する一層大きな社会問題は私の論域以外の問題である。私はただ諸君の注意を促(うなが)しただけで，それについて詳述しようとは思わぬ。ただこの一般的原理は，あらゆる形式における人生の事業と努力に適用ができるということを記憶なさい。共同事業は個人の能力でできないことを成就し得る場合のみ価値がある。そうでない場合には効能があるよりも，むしろ害になったり或は事業の進行を阻害するようなことがある。

これに対する一つの理由は，甚だ簡単だ。共同事業は，思想或は行動の個人的自由に都合がよくない。諸君が群集と共に働く時諸君は多数の意見に従うよう努めねばならない。諸君は周囲の連中と協調して行動せねばならない。文学的独創にとって，このような状態は実際どんなに不便宜なものであるかを，我々はやがて首肯し得るであろう。

しかし，あらゆる種類の文学団体を一切無差別に非難すべきものでないことを私は先づ言いたい。或る文学団体は甚だ有用である。一個人では恐らくできないことを文学のために尽して大功績を挙げたのもある。例えば英国では貴重な古本を編集刊行するための団体が組織されている。多分20位もあろうが，古代英書刊行会はその一例だ。この会や，バーシー古書刊行会とか或は諸君が，疑もなく耳にしているだろう10数個の団体の事業は，一個人では誰も成し得なかったであろう。かような事業は富裕の人でも困難とするほど巨額の金と，多大の労作を必要とするので，到底一個人の力の及ぶ処ではない。さて，このような場合には，数百人が，会して事業を援助し，そのために数十名の学者が相提携して一方向に向って彼等の努力を注ぐことになる。この種の団体が甚だ貴重なものでないと言うのは愚かである。しかし，その貴重である理由は，ただ一人の労力ではできないことを成就するからに過ぎない。

それから専門学校や大学の中に組織された団体で，文芸，討論その他すべて文章や雄弁の偉大

なる芸術の初歩に対して奨励を与える目的のものは確かに推賞に値する。その推賞すべき所以は初心者に鼓舞激励を与え，奨励なくしては試みる自信がない種々のことをさせるからである。いかに多くの学生が最初大学の会から受けた刺戟によって雄弁や詩或は小説の方に自己の才能を発見したことだろう。彼はとても演説はできないものと自分で思っていたのが，或る日非常に気が進まないけれども，同僚に強いられて止(や)むを得ず演壇に立った。するとその結果は彼が不可能と思っていたことを，同輩以上に立派にやってのける資格のあることを証明した。多くの方面における最初の試みはこのようなものである。多数が我々を強いて試みさせる。そしてこのような場合多数の勢力は個人の力を発展させることになる。しかしこのような会の価値は全くそこにあるので，そこに始まってそこに終るものと，私は矢張り言わざるを得ない。この種の驚くべき会が世界のすべての優れた専門学校や大学にある。そしてそれは才能の若々しい蕾を助長し，始めての文学的および芸術的名誉心を発展させる。しかしいくら立派な会からでも，決して偉大なものは産しない。その会は未熟者を扱っている。例えば英国の優れた大学の学生が出版した最上のものでも大抵やや未完成を免れない。この種の共同によって，文学的名誉心に与えるのに，一種の健全なる刺戟をもってすることができるということを承認すれば，我々は最早殆ど許容し得られる限りの許容をした訳である。

一たび個人の知力が蕾を破って発展すれば，その瞬間から学会や団体の勢力は利益とはならないで，阻害となる恐れがある。最初の努力を強制し，励(はげま)したその同一の団体的意向は一定の程度を越えてからは，進んで発展を遂げることに大概反対を表明する。最初の奨励は次のような奨励の文句で表わすことができる「我々と同様の功妙ぶりを発揮するよう努めたまえ」しかし後になってからは，同一の団体的意向は必ず次のように公言するだろう「脱線的であってはいけない。そんなに我々と異った考え方をしてはいけない。たとえそんな風に考えるにしても，その説は容(い)れられないのだから発表しないでくれたまえ」勿論私は事実をやや極言しているのである。しかし上に掲(かか)げた第二の文句は実際世間があらゆる独創的才能に向って発する挨拶(あいさつ)の形式である。世間は大学専門学校の文学会ほどにそんなに自由寛大，且つ鑑賞的ではない。世論は，独創的才能が伺(うかが)っている殆ど一切の方面に関して何はさて措き保守的である。世論は本能的に，一切の思想行動の因襲的形式からの離背を止めようと試みる。しかも一定の大きさの相当に発達した団体は，強度に世論を代表するに相違ない。だからそれを発展させる勢力としてよりは，寧ろ抑圧力として強く働く傾向がある。だが文学的団体において，文学上の個人的独立と同人相互の奨励の適当な状態は，その会員の数如何によらねばならぬと，私は敢言しようと思う。そして私はその数を頗る少く決定せねばならない。あまりに少数なので諸君は聊(いささ)か私の説に対してびっくりすることと思う。私が述べているような種類の文学団体は，いつでも2人乃至3人より多数であってはいけないと，私は考える。3人の結合は，でき易くもあるし，また有益なことが実証せられている。それ以上の数は4人でさえも私は危険と思う。そして3人の結合は性質の類似するものではなく相異ったものの結合でなくてはならないと私は考える。同盟の永続は，理想や意見の一致よりも相

互の尊重鑑賞如何によるであろう。だが当然こんな疑問が起ってくる。「3人の仲間を文学団体と称することができるか」恐らくはできまい。しかし私は確信するが，文学上の目的に対してそれより大きな結合は何等立派なことを成就しないだろうし，また経済的補助を供するような目的を除いては作るべきでもない。さて私はその訳を説明してみよう。

専門文士達の間における経験の示す処によれば，彼等が更に高尚なことを実現するためには，真に相互に助け得る方法即ち感化力は唯一つあるのみだ。即ち友情と同情である。真正の友情は心と心の間に完全の自由を得させる。即ち両者間の完全な卒直，完全な理解。だから，完全の同情を成立させる。しかし人性の状態において，たとえ性質一様な人々の間においても完全な友情は，沢山の人数へは滅多に拡がって行かないのが常である。だからこの問題に関してスペインの諺がある。それは引用に値する。

一人は，	仲間ではない。	Compania de uno, compania ninguno ;
二人は，	神の仲間だ。	Compania de dos, compania de Dios,
三人こそ，	仲間だ。	Compania de tres, compania es ;
四人は，	悪魔の仲間だ。	Compania de cuatro, compania de Diablo.

さて，これは可笑しく思われるだろうが，多くのスペインの諺と同じく，実際賢(さか)しい諺である。何故と言うに，これは三人以上の完全な友達仲間は実際になかなか，むずかしいということを示すからである。四人が仲間となった場合には，大抵意見または感情の分裂が生じてくる。というのは，議論紛々たる或る問題が起ると，二人が提携して他の一人または二人に向って反抗し易いからである。諸君はこのことを諸君自身の経験においても，真実だと知ったに相違ないと私は信じる。要するに，真に厳粛高級な文学目的の会合は，友情と同情の上に建てられてこそ始めて有益且つ永続的であり得る。しかも必要で理想的な友情と同情は，三人以上の会合からは期待されない。

多分諸君はラファエル前派同人（訳者注：ロセツティ，Dante Gabriel Rossetti, 1828-1882；ミレー Jean Francois Millais, 1814-1875 等7人は1848年当時の英国画壇の流風に反抗し，ラファエル前に遡(さかのぼ)って，一そう単純にして自然的な理想に帰るという旗を翻えした）およびその他の結社のことを考えるでしょう。しかし我々がこれら諸団体の詳細な事情を十分知ってくると彼等は，実際には，寧ろ名目上の団体であったことが分かる。ラファエル前派同人は，ただ3人づつの集団で存在していたのだ。そしてそれらの集団は，長期の間隔をもって互に接触した。3人づつを極めて細い糸で繋いでいたのは，ある用務上の必要であった。諸君は英文学史において殆どすべて偉大な作家は，孤独であって，甚だ少数の友人しかなかったということを発見するだろうと私は信じる。確にこれが近代における事実である。私が指摘したような方法以外に，文学的団結が，真面目な文士にとって重要であり得る場合はありそうに思われない。

諸君は英米には何千もの文学団体があること，殆どあらゆる田園都市に或る種の文学団体があ

ることを多分想起するでしよう。実際，横浜，神戸でも外国商人たちは，所謂文学会を作っていることを私は挙げてもよろしい。しかしこれ等の団体は必らずしも文学を名のっているからといって文学的なものであるというのではない。英国その他の文学会の評判に欺かれてはいけない。このような会は，普通の学者の念頭に浮ばぬような目的のために作られる。それは青年男女を一堂に会せしめたり，親たちにその娘を結婚させたり，貧弱な音楽家や，小詩人や，人気がある新聞雑誌記者に，幾らかの社会的勢力を得させたりするために全く社交的な目的で組織される。その団体がどんなに大きくとも気にすることはない。それが真の目的なのである。少しばかりの音楽がある。少しばかり演説がある。平凡な論文が読まれる。それから，沢山の紹介が行われる。世間の噂や無駄話が賑う。これは文学という問題の単に平凡下劣な戯弄に過ぎない。私は今そんな連中よりは，もっと優れた人々，教育ある人々に向って語っているのだ。大学の人は文学を真面目に考えねばならないから，彼は私が今述べたような馬鹿らしい種類のものに興味を持つことはできない。また彼にとってはそんなものは，ただ馬鹿らしいものとして存在し得るばかりだ。真正の作家はこのような団体に煩わされない。

さて以上を総括して言えば，大学，時としては大学以外に，組織される真面目な文学的団体はこんな価値をもつ。一般の標準にまで人を引き上げる助けになるということ。さて「一般の標準」とは「普通」を意味している。それ以外の何ものをも意味することはできない。しかし青年男女即ち多情多感の若い人々は，先づ普通の高さまで上って行かねばならない。彼等は成長せねばならない。だから，このような団体は青年に貴い奨励を与えると私は言うのである。しかし，団体は，諸君が一般の標準へ達するのを助けても，それ以上のところへ引き上げる助けになるものではない。苟も十分な知的実力に達した人は，それから何の利益も得ることはできない。真正の意義の文学は，一般の標準に留まるものではない。一般の標準よりも遙か上に高く飛翔するものが異常なるもの，並外(なみはず)れたもの，力強いもの，案外なものだ。従って文学を専門にしようとする大学卒業生が文学団体に加盟することは，まるで登山者が両足の踝(くるぶし)に巨大な石を結付けて出発するようなものだから，彼は自縄自縛の愚を学ぶべきではないと私は考える。

しかし，私は文学的団体の価値に異論を唱えたにも拘わらず，白状すれば私もまた一つの文学的団体に属している。が，これはこの種のものの中で最も訳が分かった実際的な団体である。それには是非出席しなければならないという会合も催されない。何の文学的制作の要求もない。他の会員を知るべき義務さえもない。我々は毎年醵金する。しかも20年間もそれをしなければならないが報酬としては何も受けない。では，そんな会の効用は何ですかと諸君は尋ねるでしよう。それは実際頗る有用である。幾千の作家がそれに加入している。しかし滅多にそれを利用する者はない。その目的は不正な出版者に対して著作家の利益を擁護するために立派な弁護士を雇う金を備えることである。著作家は一般に甚だ貧乏で，実務の取引においてその弱点に乗じられ易い。出版者に対して訴訟事件を起すということは，十中の九まで貧乏人には不可能である。しかし，もし，1,000人の貧乏人が同盟して，各自が毎年少額の出費によって，それに対する直接の収益を何も

望まないで，権利と正義の維持を図っていけば多大の効果があるだろう。実際その団体は頗る熟練した法律家および顧問を使っている。もし一人の会員が不正な待遇を受けると，他の全会員がこのようにして協力擁護する。さて，このような目的のためにこそ実際団体は作られねばならない。個人が到底独力でできそうもないことを，団体がその会員銘々のために行うというだけで，その他の点においては絶対の独立が存在している。誰もが会のために，自宅で，時間や仕事を提供するに及ばない。文学的事業の計画は何もない。すべての法律上の事務は嘱託の専門家によって行われる。この種の団体が，日本の著作家の利益を保護し，将来の日本文学の発達を保護するという一般の目的をもって組織されたなら，非常な効果があるだろうと私は考える。しかしそうでなければ，3人以上の会員を有するいかなる種類の文学団体も大学卒業生にとって価値あるものとは思われない。

ハーンの伝記の中で田部は，大学（東京文学大学）も，ヘルンの思うようには暇でなかった。

年々歳々同じ講義を繰り返す例もないではないが，ヘルンにはそれができなかった。絶えず新しい講義をするためには，その準備に絶えず苦心せねばならなかった』と述べている。

「個々の文人に対して，特別の講義をする他に，現在の文学上の大きな事件即ち少くとも何か重大な道徳的或は社会的の意義をもっているように思われるものについて，折々の話をするのが矢張り，私の義務と信じる。諸君は大学教育を受けている間に，このように文学上の事件に注意して，それに関して相応の正しい予測と判断をするように習慣をつける方がよい。将来の見込みは――少くとも文学界においては――現在の出来事でなされるからである」とハーンは学生に向って助言を与えている。時間の不足を常に託(かこ)ち続けていたハーンにとって上記のような機会教育的にその講義を進めて行くことが，どのように大きな負担を意味していたことか。想像に余るものがあったことだろう。「義務であると信じる」と観じ切るより他に仕方がなかったのではあろうが。それにしても，その実践を継続しようとの決断力実行力の果敢さには驚嘆するばかりである。

文学的団体の功過について，彼は微に入り細をうがちつつ縦横無尽に論破している。単に英文学の問題を離れて，「全体」と「個」，「団体」と「分子」という古くて，永遠に新しい問題を手ぎわよく解剖して見せてくれている。その熱意を込めた講義の場所に，自分も参加している思いである。

（未　完）

参　考　文　献

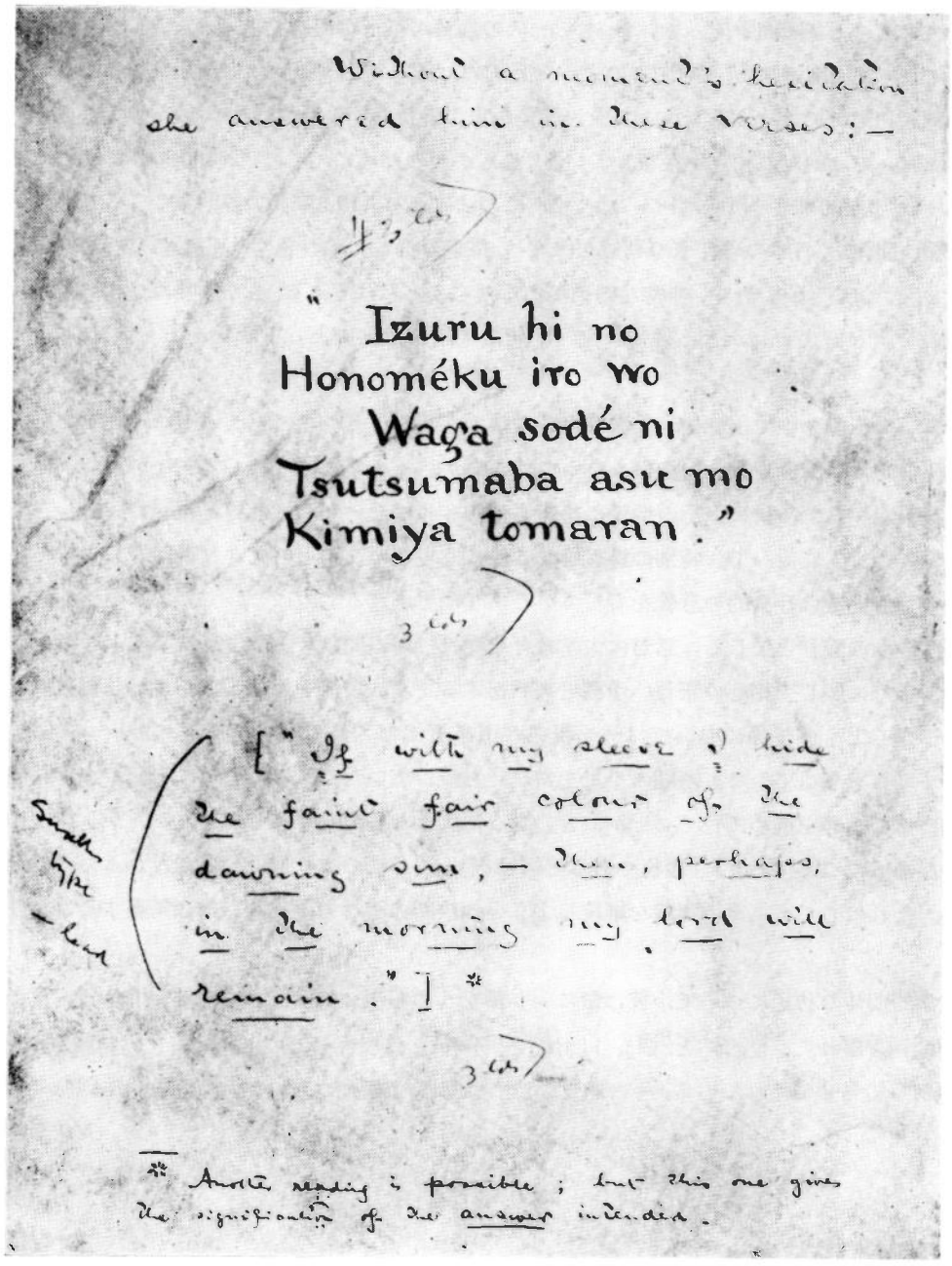
小泉八雲全集（第一書房）

池野　誠著　松江の小泉八雲　雑誌へるん

広瀬朝光著　小泉八雲論　研究と資料

田部隆次著　小泉八雲(ラフカディオ・ヘルン)

ハーンの筆蹟


Without a moment's hesitation she answered him in these verses :—

"Izuru hi no
Honoméku iro wo
Waga sodé ni
Tsutsumaba asu mo
Kimiya tomaran."

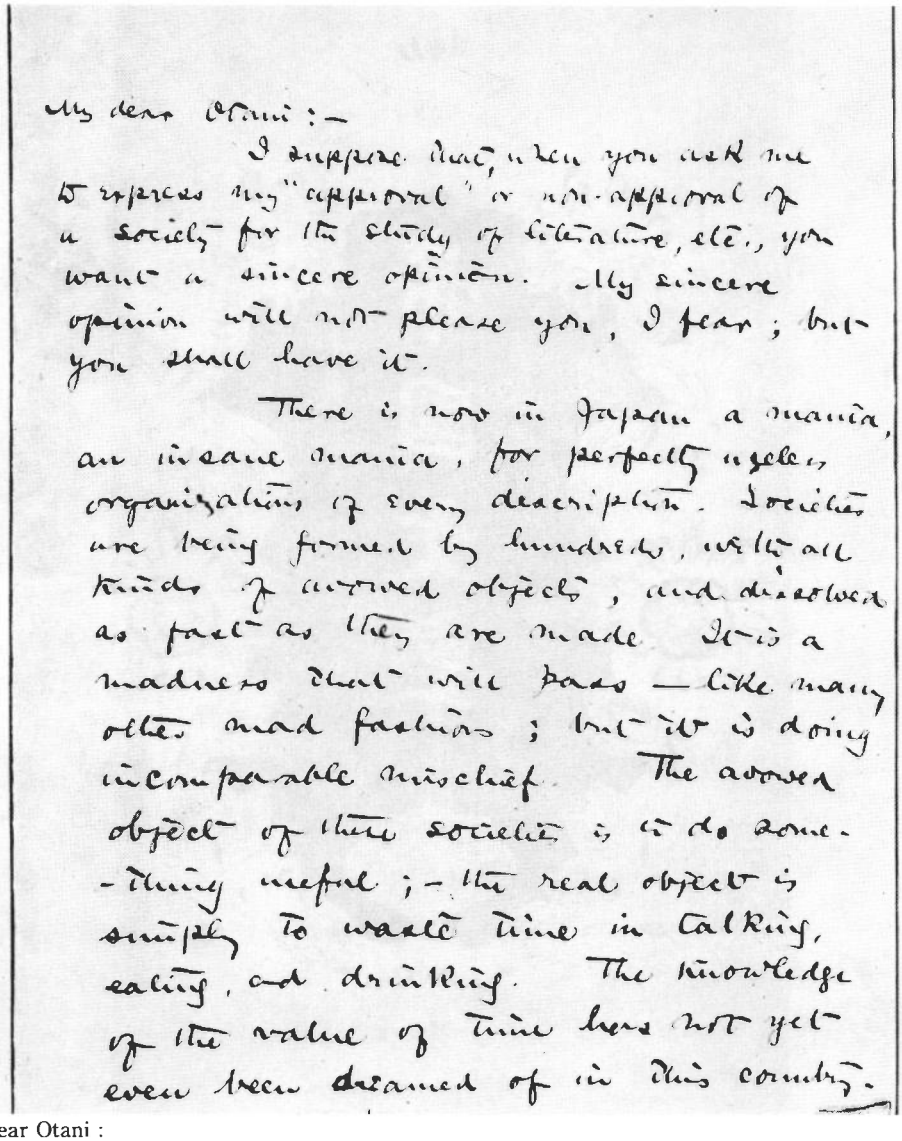
[" If with my sleeve I hide the faint fair colour of the dawning sun, — then, perhaps, in the morning my lord will remain."] *

* Another reading is possible ; but this one gives the signification of the answer intended.

Without a moment hesitation she answered him in these vereses : ——
"Izuru hi no Honomeku iro wo Waga sode ni Tsutsumaba asu mo Kimiya tomaran."
〔"If with my sleeve I hide the faint fair colour of the dawning sun, —— then, perhaps, in the morning my lord will remain".〕
Another reading is possible : but this one gives the signification of the answer intended.

（文責在筆者）

ハーンの書簡（前号大谷宛「文学会とは」と筆者が題したものの原文）



My dear Otani :

I suppose that, when you ask me to express my "approval" or non-approval of a society for the study of literature, etc., you want a sincere opinion. My sincere opinion will not please you, I fear ; but you shall have it.

There is now in Japan a mania, an insane mania, for perfectly useless organizations of every discription. Societies are being formed by hundreds, with all kinds of avowed objects and dissolved as fast as they are made. It is a madness that will pass —— like many other mad fashions ; but it is doing incomparable mischief. The avowed object of these societies is to do something useful ; the real object is simply to waste time in talking, eating and drinking. The knowledge of the value of time has not yet even been dreamed of in this country.

（文責在筆者）

明治37年11月10発行の帝国文学のハーン　追悼号。

教え子たちの思い出の数々を収(おさ)めた好著――本誌は帝国文学会の機関紙として明治28年1月に創刊，大正9年1月，通巻296号で廃刊。大正6年3月～9月休刊。帝国文学会は帝国大学文科大学(東京大学文学部の前身)の教授卒業生在学生が集まり「共に文学を研究し親睦を厚うする」目的で組織された。雑誌編集は会員から選出された編集委員が担当。執筆者には高山樗牛，井上哲次郎，土井晩翠，登張竹風，片山孤村，厨川白村，阿部次郎，久米正雄，芥川竜之介らの名が見える。文芸雑誌と人文科学研究誌の二面性を有し，国民文学論の提唱や外国文学の紹介に貢献　(小学館，大日本百科辞典)

既述の通り小山内薫(おさないかおる)の「留任」も本号に在り。